# まったくなってないわれわれの機関の改善のために

## 三

覚え書のつづき

1922 年 12 月 26 日

中央委員の人数を 50 人または 100 人にふやすことは、私のみるところでは、二重の目的、いや三重の目的にさえ役だつにちがいない。中央委員が多ければ多いほど、それだけ多くの人が中央委員会の活動で訓練されることになり、また、なにか慎重を欠いたやり方のために分裂がおこる危険はそれだけ少なくなるであろう。多数の労働者を中央委員会にいれることは、まったくなっていないわれわれの機関を労働者たちが改善する助けとなるであろう。この機関は、わが国では、実質上旧体制からうけついだものである。というのは、こんなに短い期間に、とりわけ戦争や飢饉などのさいに、それを改造することは、まったく不可能だったからである。だから、うす笑いをうかべたり、それみたことかとばかりにわれわれの機関の欠陥を指摘してくださる「批評家」にたいしては、われわれは、この連中は現代の革命の条件を全然理解していないのだ、と平静にこたえることができる。五年のあいだに機関を十分に改造することは、まったく不可能であり、とりわけわが国の革命がおこなわれてきた条件のもとでは、なおさら不可能である。われわれが三年のあいだに新しい型の国家、労働者がブルジョアジーに反対して農民の先頭に立ってすすむ国家をつくりだしたというだけで十分であり、しかも、敵意をもった国際的環境のもとでこういうことを成しとげたのは、巨大な事業である。しかし、このことを意識しながらも、われわれが実質上ツァーリとブルジョアジーとから古い機関をひきついだのだということ、そして平和がやってきて飢えないだけの最小限の必要物が保障された今日では、機関の改善にすべての活動を向けなければならないということに、けっして目を閉じてはならないのである。

私は問題をつぎのように考えている。中央委員会にはいった何十人かの労働者は、ほかのだれよりもりっぱに、われわれの機関の点検や改造の仕事にあたることができる。この機能は、はじめ労農監督部に属していたのであるが、同部にはこの機能に応じる力がないことがわかったので、一定の条件でこれらの中央委員にたいする「付属物」または助手として同部をつかうほかはない。中央委員会にはいる労働者は、私の意見では、長期間ソヴェト機関で勤務してきた労働者（私の手紙のこの部分では、労働者というなかにいつでも農民をふくめて考えている）のなかからおもにえらぶのであってはならない。というのは、そういう労働者には、すでにある種の伝統とある種の先入見とができあがっているものであるが、まさにそれらのものとたたかうことがのぞましいからである。

労働者出身の中央委員としては、わが国でこの五年間にソヴェトの職員に昇進した層よりも低い地位にあって、平の労働者・農民にいっそう身近く、しかも、直接にも間接にも搾取者の部類にはいらないような労働者を、おもにくわえなければならない。私は、こういう労働者が中央委員会のすべての会議、政治局のすべての会議に出席し、中央委員会のすべての文書を読むなら、彼らは、ソヴェト体制の献身的な支持者――第一に、中央委員会そのものに安定性をあたえる能力があり、第二に、機関を革新し改善するためにほんと

うに働く能力のある支持者の基幹部隊となることができるだろうとおもう。

**レーニン**

エリ・エフこれを筆記

二二年十二月二十六日

第 36 巻『大会への手紙』P705～707

1922 年 12 月 26 日